

水産海洋地域研究集会

第43回 「相模湾の環境保全と水産振興」シンポジウム

—新しい水産資源管理の方向と黒潮大蛇行にともなう相模湾の漁況との関わり—

日時：2019年11月1日（金） 9：30—15：00

場所：小田原市生涯学習センターホール

共催：水産海洋学会，(公財)相模湾水産振興事業団，小田原市

コンビナー：松山優治(東京海洋大)，武井 正・岩田静夫((公財)相模湾水産振興事業団)，利波之徳(神奈川県水技セ)

開会の言葉：高橋征人（相模湾水産振興事業団） 9：30—10：00

挨拶：山下 洋（水産海洋学会長）

加藤憲一（小田原市長）

武井 正（相模湾水産振興事業団理事長）

座長：鎌谷明善（東京水産大名誉教授）・長島秀樹（東京海洋大名誉教授）

基調講演

水産資源管理の現状・課題と新しい資源管理の方向について 10：00—10：50

櫻本和美（東京海洋大名誉教授）

話題

1. 黒潮大蛇行と相模湾および周辺海域の海況への影響 10：50—11：30

美山 透（(国立研究開発法人)海洋開発研究機構）

・・・・・・・・・・昼 食・・・・・・・・・・ 11：30—12：30

座長：一色竜也（神奈川水技セ 相模湾試）石黒雄一（神奈川水技セ 内水面試）

2. 黒潮大蛇行と定置網などの漁況との関係 12：30—13：10

高村正造（神奈川水技セ 相模湾試）・長谷川雅俊（静岡水技研 伊豆分場）

3. 黒潮大蛇行とシラス船曳漁況 13：10—13：50

岡部 久（神奈川水技セ）・楯慎一郎（いであ(株)）

総合討論 13：50—15：00

座長：松山優治（東京海洋大名誉教授）

(1) 現場からの意見

- ① 定置網漁業：田中邦夫（平塚市漁協） ②シラス船曳漁業：杉山 武（平塚市漁協） ③これからの定置網漁業：大浦航平（小田原市漁協）

(2) 討論

閉会のことば：加藤 孝（相模湾水産振興事業団）

開催主旨：神奈川の沿岸漁業は、年間1.5—2万トンの多様な魚介類を生産しており、概ね90%が相模湾で漁獲されている。相模湾漁業は大・小の定置網、刺網、中小まき網、シラス船曳網、その他の釣りなどで構成され、漁獲量の約70%が大・小定置網で漁獲されている。2007年以降の定置網で漁獲される漁獲組成をみると、サバ類、アジ類、イワシ類、ブリ類、ソウダガツオ類、カマス類などの広域回遊性魚類が80—90%を占めている。これにまき網やシラス船曳で漁獲されるイワシ類を加えると、広域回遊性魚類の資源変動が相模湾漁業の豊漁・貧漁の鍵を握っている。

現在、水産庁ではMSY（最大持続生産量）理論を根幹として求めた広域回遊性魚類の資源変動を根拠に資源管理に取り組んでいるが、現場の漁獲状況の資源変動がMSY理論の前提に殆ど適合しないことから、今後は資源変動に大きな影響を及ぼす海洋変動を取り入れて資源管理に取り組む必要があるとされた(42回相模湾シンポ)。

2016年以降、相模湾漁業の漁獲量は1.4万トン前後まで減少している。その要因として、広域回遊魚類資源の減少と2017年9月から発生した典型的な黒潮大蛇行にともなう広域回遊魚類の来遊量の減少などが挙げられる。2004年7月—2005年8月に起こった黒潮大蛇行期にも今回と同様な不漁現象が相模湾から東海海域で起こった。

そこで、今回のシンポでは、まず現行のMSY理論を根幹にした資源管理の課題と海況変動を考慮した新しい資源管理の方向について学び、さらに2017年9月に発生した黒潮大蛇行の特徴と大蛇行が相模湾および周辺海域の海況・漁況との関わりについて議論し、今後の相模湾漁業の管理方針に活かしていきたいと考えている。